

クズと焚き火のふしぎな関係

畜産飼料作研究領域

福田栄紀

FUKUDA, Eiki



《耕作放棄地にはびこるクズのスゴイ繁殖力》

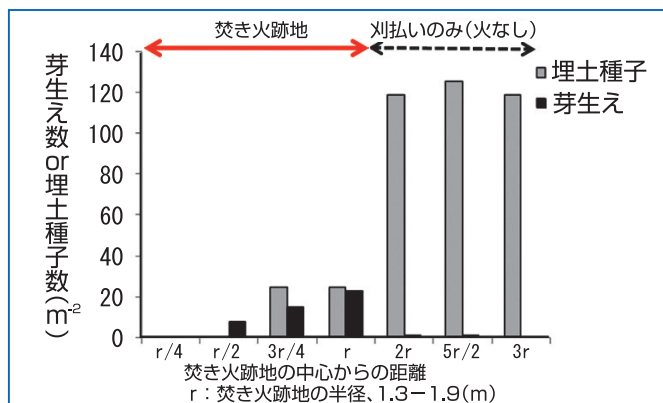
ツルの伸びる長さは一日で最大30cm弱、一夏で30m以上。全国至る所の道端、林縁等に自生するクズは、この特異な伸長能力で他の植物を覆い隠すほど旺盛に繁茂します。そのため、農林業や法面の緑地管理上厄介な植物でもあります。近年、耕作放棄地が増えていますが、そういう場所には必ずと言っていいほど現れ、農地を再利用しようとする際の障害となっています。そのため、クズの繁殖特性を明らかにし、その特性に応じた適確な対処法が求められています。

そこで、放棄されてから20年が経ちクズその他が藪状に繁茂する「元」畑を対象とし、まず生えている植物を刈払い、5月中旬に枝葉を集めて燃やし更地にしました。2週間後そこに羊を放牧し再生してくる草木を食べさせる実験をしました。

《クズの種子繁殖特性》

この実験で次の二つが明らかになりました。

①クズ繁茂地の土壌中には硬い皮で被われた小さな小豆ほどのクズの種子が長年死なずに多数埋まっています（埋土種子）。植物の刈払いにより露出した土壌に直射日光が当たり地温は上昇しますが、クズの埋土種子はその程度の温度上昇刺激では目を覚まさず、そのほとんどが眠ったままです（図右側：刈払いのみ）。一方、焚き火跡地ではしばらく何も生えてこなかったのですが、真っ先に一斉に芽生えたのはクズ



図／焚き火跡地とその周辺から発芽したクズの芽生え数と埋土種子数

でした（図左側）。しかし、焚き火の中心部に向かうにつれ熱すぎて死ぬのか、発芽する種子も埋土種子として生き残る種子も次第に少なくなりました。クズ埋土種子の目覚めには、単なる刈払いなどによる露出表土の地温上昇では不十分で、「火」によるより高温の刺激が必要と言えます。

②焚き火跡から芽生えたクズは、周囲の植物や種子が焼け死んで生えて来ないので、羊が放牧されないとその旺盛な伸長力により一気にツルを伸ばし、その年の秋には再び最も優占する植物種となりました。しかし、放牧されると、その枝葉は高タンパクのため好んで食べられ、再繁茂することなく全滅しました。

日本では、春先山火事や野火が林縁で多発し、また人里では農地周辺や道端で野焼きや火入れが長年繰り返されてきました。クズが持つこのような高温域での発芽特性や、芽生えの急速な伸長特性の背景には、これら自然発生的、また人為的な「火による攪乱」の長い歴史の影響があるのかもしれない。



写真／ガードレールや他の植物を覆い尽くす道端のクズ